戦後日本社会学のリアリティ――せめぎあうパラダイム

シリーズ

社会学のアクチュアリティ:批判と創造

企画フェロー

†藤田

西原 和久 (成城大学教授) 武川 正吾 (東京大学教授)

**敏雄** (大阪大学教授) 和久 (元慶應義塾大学教授) 弘夫 (元慶應義塾大学教授) 昌弘 (中央大学教授)

直樹(大妻女子大学教授)

吉原 田田

(五〇音順)

は

しがき

いである。 ある。多様な主題やアプローチから、戦後日本社会じたいのリアリティも読み取っていただければ幸 の際とくに、 本書は、 戦後の日本社会学があゆんだ道を、日本社会の変動を念頭において論じたものである。そ 戦後社会学のリアリティを描き出すために、せめぎあうパラダイムに留意したつもりで

今日、日本社会はグローバル化の波のただ中にあり、しかも二○○五年ごろから明確になったよう

ような、これまでの右肩上がりの成長を当然視した時代とは一見して様相を異にする社会の出現 る。イノベーションの進展も著しい。コンピュータやインターネットの活用に伴う情報社会化 に、人口減少を伴うダウンサイジングの少子高齢社会に入っている。戦後の高度成長期に実感できた この側面 であ

だが、イノベーションに伴う日本社会の変化は顕著ではあっても、そこに暮らす人々の生活世界は

もすぐに思いつくことであろう。

i タイムラグを伴うことも少なくない。また外国人居住者の増大によって日本社会の多文化状況が語ら

ii

理論 続」にも着目したかったからである。 ではなく、戦前の社会学にも言及するように各執筆者にお願いした。 は難しい。 もちろん、現在に至るまでの日本社会学と日本社会の全体の様相を論じることは本書のような小著で こそ、これまでの社会と社会学のあゆみを、この段階で再検討しておくことが重要な作業なのである。 語れるものでもない。 学が問題にする環境問題や災害問題ですら、社会がそれにどう対応するのかといった側面を無視して とりわけ若い世代においては、これまでの日本社会学と日本社会のあゆみに馴染みがない方も増えつ 社会のあゆみとともに生活を営んできた年長世代の人びとの思いも決して無視できないものとなる。 れるなかで、 し出す領域でもあると判断したからである。 きたのかという問いは、 日本社会学が大きな成果を上げてきた領域でもあり、同時に日本社会の戦後のあゆみを的確 のあゆみの九つの主題に限定して、論じるにふさわしい方々に執筆をお願いした。こうした主題 そこで本書では、 日本の伝統や文化の独自性を論じる人も少なくない。そして、高齢社会ではそれまでの 世代間理解も重要な課題となる。 未来を展望しながらも、これまで日本の人びとはどのような社会生活を営んで 決して後ろ向きの議論ではない。むしろ新たな時代への対応を迫られるから 家族、 農村、都市、 さらに、 さらに、 企業、 執筆に当たっては、 階層、 新たな技術革新の側面のみならず、 教育、 戦前と戦後の「断絶」とともに「連 宗教、社会意識、 いきなり戦後から論じるの そして社会学 自然科 に映

本書に収められた諸論考は、それぞれの主題に関して、 的確にこれまで日本社会学と日本社会のあ 次の時代を切り拓いていくための跳躍台として、本書が活用されることを願ってい 詫び申し上げたい。 た読者の方々、 みる前 なかなか提出されずに、 ことによるもので、 近に至るまでの新しい ただいただけでなく、 もかけず長 B お願いした藤田弘夫氏は、すぐに原稿を提出してくださったが、きわめて残念なことに本書の刊行を á の基本を描き出していると編者たちは考えている。 に他界されてしまった。 また、 時間がかかってしまった。 ならびに東信堂の下田勝司社長および編集の向井智央氏にも、 各章の主題によって新しい事項を加筆しやすい章とそうでない章がある。 編者としては、本書で示された日本社会学と日本社会の戦後のあゆみをふまえて、 その責任は編者 何回 事項が加筆されている章とそうでない章があるが、 執筆者を差し換えるという事態も生じた。とくに、ピンチヒッターで執筆を [か追加の執筆をお願いすることになり、 ご冥福を心からお祈りしたい。 にある。 早い段階で寄稿していただいた執筆者の方々には、 心からお詫びしたい。 とはいえ、 本書 また、 たい 本書の刊行に至るまでには、 の予告が出てからお へん迷惑をおかけすることに これは刊行が大幅に遅れ 部の執筆依頼者 この場をお借りしてお る 詩待ち そのため最 お待 0 源稿 ただ 思 5 が た W

者

第2章 日本の農村と戦後農村社会学の展開	おわりに――家族社会学のアイデンティティ再考	5 転換期	4 隆盛期	3 確立期	2 戦前の家族研究	1 時代区分と方法	はじめに	――家族社会学の成立と展開 第1章 家族社会学からみる日本の社会と家族のリアリティ	はしがき	目次/戦後日本社会学のリアリティ―せめぎあうパラダイム
S開 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	38	32	19	10	6	4	3	豕族のリアリティ 池岡 義孝 3	1	タイム
43								3		

v

1

農村の変貌と農村研究の軌跡

45

第 4 章	5	4	3	2	1	第 3 章	おっ	5	4	3	2
	都市社会学の展望と課題	都市社会学の発展と多様化	敗戦後の都市社会学の模索と確立 96	戦前における都市社会学の胎動91	都市社会学史を問うことの意義 87	都市社会学発展の多様性と多系性 日本の都市社会学史をどのように考えるか ·····・・ 藤田 弘夫 87	わりに――これからの農村社会学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	二〇〇〇年以降の農村社会学65	一九七○年代以降の研究──動揺する「むら」の把握をめぐって 58	一九七○年まで農村社会学──民主化・近代化・資本主義化のもとでの農村研究 51	分水嶺としての一九七〇年と二〇〇〇年4

6	5	4	3	2	1	第 5 章	おっ	3	2	1
産業社会学に問われていること (九〇年代以降)	「ポスト・フォード主義モデル」としての日本企業(八○年代後半~九○年代前半) 156	労働者意識概念の転換(八〇年代前半)15	「日本モデル」としての企業 (七○年代)	「セキュリティ機構」としての企業(戦後~六○年代)	産業社会学と「企業社会」 43	職業社会を読み解くパースペクティブ 産業社会学と企業社会論 ·············· 13	わりに――格差社会に直面する階層研究の課題	「中流社会」の動揺と階層形成の新たな輪郭	高度経済成長と「中流社会」の自己像	戦前から戦後へ――貧困研究と階級把握

第 8 章	3	2	1	第 7 章	4	3	2	1		第 6 章
戦後日本社会学における「社会的なるもの」への想像力流言研究と「社会」認識231	近代性を相対化する 216	救済思想と近代へのオルタナティブ1	新宗教の位置づけへの問い 203	戦後の宗教社会学とその周辺新宗教研究と近代性の理解 ················ 島薗 進 203	学歴社会論の現在、そして未来へ187	戦後日本の学歴社会研究史 15	学歴社会は悪なのか? 13	学歴社会とは何か 17	――「学歴」をめぐる戦後日本の教育社会学研究史	「学歴社会」論のゆくえ 中西 祐子 171
231				203						1/1

									4.5				
41.	1	<b>+</b>	2.5	4	0	_	,		終	4	0	0	,
<b>新</b>	人夕	争佰	おわ	4	3	2	1	ば	章	4	3	2	1
執筆者紹介	人名索引	事項索引	わりに――日本社会学の「国際化」という課題28	日本社会学の現在から未来へ――トランスナショナル/グローバルな社会学は可能か 287	現代日本の社会学理論の主要論題――いま何が問われているのか 284	戦後の日本社会と日本社会学 23	戦前の日本社会と日本社会学 27	はじめに――本章の視角と問題の所在 265	<b>グローバル化するニー世紀社会への課題</b> 日本における社会学理論の展開 西原 和久	「社会的なるもの」の位相を問う255	流言研究の機能分化のなかで 238	清水幾太郎 『流言蜚語』の戦前と戦後	「社会」の自明性と「社会的なるもの」の潜在化 31

265

吉野 英岐(よしの ひでき) 岩手県立大学総合政策学部教授。

1960年生まれ。慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。

【主要著作・論文】「戦後日本の地域政策」『地域社会学講座 第3巻 地域社会の政策とガバナンス』(岩崎信彦・矢澤澄子監修、東信堂、2006年)、「東日本大震災後の農山漁村コミュニティの変容と再生一岩手県沿岸地域での調査から」(コミュニティ政策学会編『コミュニティ政策 10』、東信堂、2012年)、「昭和・平成の合併における地域統合政策の展開と課題一青森県八戸市南郷区を事例として」(佐藤康行編・日本村落研究学会企画『村落社会研究 49 検証・平成の大合併と農山村』、農文協、2013年)。

† 藤田 弘夫(ふじた ひろお) 元慶應義塾大学文学部教授。

1947 年生まれ。2009 年没。慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程修了、博士(社会学)。

【主要著作・論文】『都市の論理』(中公新書、2008年)、『路上の国柄―ゆら ぐ「官尊民卑」』(文藝春秋社、2006年)、『都市と文明の比較社会学』(東京大 学出版会、2003年)。

丹辺 宣彦 (にべ のぶひこ) 名古屋大学大学院環境学研究科教授。

1960年生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。

【主要著作・論文】「産業の近代化と社会的空間」『講座社会学5 産業』(東京大学出版会、1999年)、『社会階層と集団形成の変容』(東信堂、2006年)、『豊田とトヨター産業グローバル化先進地域の現在』(共編著、東信堂、2014年)。

**山下** 充(やました みつる) 明治大学経営学部准教授。

1966 年生まれ。早稲田大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程修了、博士(文学)。

【主要著作・論文】『「働くこと」を社会学する』(小川慎一・山田信行・金野美奈子・山下充著、有斐閣、2015年)、『工作機械産業の職場史 1889-1945』(早稲田大学出版部、2002年)。

中西 祐子(なかにし ゆうこ) 武蔵大学社会学部教授。

1968 年生まれ。お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士課程修了。博士(学術)

【主要著作・論文】『ジェンダー論をつかむ』(共編著、有斐閣、2013年)、『格 差社会を生きる家族』(共編著、有信堂高文社、2011年)、『ジェンダー・トラッ ク一青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』(東洋館出版社、1998年)。

### 編者紹介

#### 池岡 義孝 (いけおか よしたか)

早稲田大学人間科学学術院教授。

1952 年生まれ。早稲田大学大学院文学研究科単位取得学。

## 【主要著作】

『戦後家族社会学文献選集』(共同監修、日本図書センター、2009年)。

「戦後家族社会学の成立と家族調査」『年報社会科学基礎論研究』第2号(社会科学基礎論研究会、2003年)。

「戦後家族社会学の展開とその現代的位相」『家族社会学研究』22 (2) 号(日本家族社会学会、2010年)。

#### 西原 和久(にしはら かずひさ)

成城大学社会イノベーション学部教授。名古屋大学名誉教授。

1950年生まれ。早稲田大学文学研究科博士課程単位取得退学、博士(社会学)

### 【主要著作】

『意味の社会学―現象学的社会学の冒険』(弘文堂、1998年)。

『自己と社会―現象学の社会理論と〈発生社会学〉』(新泉社、2003年)。

『間主観性の社会学理論―国家を超える社会の可能性 [1]』(新泉社、2010年)。

『トランスナショナリズムと社会のイノベーション―越境する国際社会学とコスモポリタン的志向』(東信堂、2016年)。

# Reality of Post-war Japanese Sociology

シリーズ社会学のアクチュアリティ:批判と創造2

#### 戦後日本社会学のリアリティ――せめぎあうパラダイム

2016年10月31日 初版 第1刷発行

[検印省略]

\*定価はカバーに表示してあります

編者 © 池岡義孝·西原和久 発行者 下田勝司 印刷·製本 中央精版印刷 東京都文京区向丘 1-20-6 郵便振替 00110-6-37828 発 行 所

類 東信堂

〒113-0023 TEL 03-3818-5521(代) FAX 03-3818-5514

E-Mail tk203444@fsinet.or.jp URL: http://www.toshindo-pub.com/ Published by TOSHINDO PUBLISHING CO.,LTD.

1-20-6, Mukougaoka, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0023, Japan